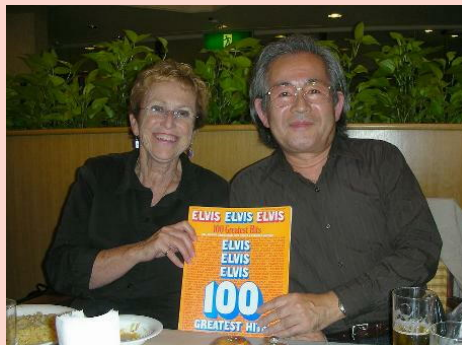
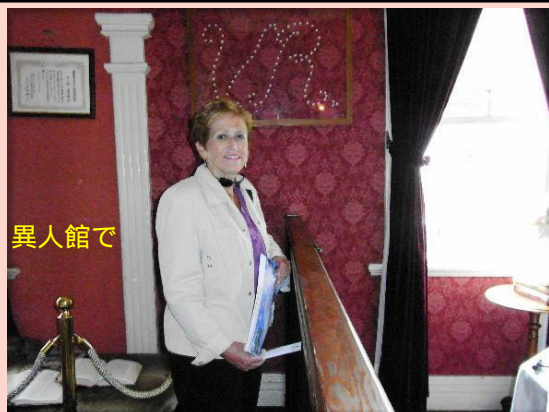
JI3ZAG
Osaka I-House Radio Club
Newsletter
November 2008

WA6UVFジニーさんを迎えた10月度の月例会

JA3AER 荒川泰藏

大阪国際交流センターラジオクラブ (JI3ZAG)は毎月第2金曜日に月例会を開催していて、その時期に大阪を訪れる海外のハムがよく参加されますが、去る10月10日 (金)の月例会にはJR3MVF三好さんに連れられて、当日関西国際空港 (KIX)に到着したばかりのWA6UVF, ジニーさん (Jeanie Parker)が参加されました。彼女は大阪で開催された2005年のAPDXCや2006年のSEANETコンベンションでも来阪されていますので、ラジオクラブのメンバーにはお馴染みです。今回はインドへの旅行の途中で立ち寄ったとのことで、次の週に三好さと共にインドのNIARの25周年記念式典に参加するためインドに向かうとのことでした。いつのまに頼んだのかJE3BEQ宮本さんは、彼女から"ELVIS 100 Greatest Hits" というギターの楽譜を受け取り、これを弾きこなすには何年もかかると上機嫌でした。何時の日か、宮本さんからその演奏を聞けることを楽しみにしましょう。当日の参加者はその他に、JA3AA島さん、JA3TXZ印田さん、JA3VWT中野さん、JK3IYB西さんと筆者の計8名でした。

WA6UVF(Jeanieさん)との神戸散策 JE3BEQ 宮本 誠一

このたびWA6UVFジェニーさんが来阪され久し振りのクラブメンバーとの再会を楽しみましたが、その時彼女を半日何処かに案内する約束をしました。
当日（10月15日）私としては珍しく多忙なため午後4時までのお付き合いとしましたが、前日の検査受診の処置のため美味しいものを食べることを制限されることは予想していましたので（もちろんアルコールも）、彼女にそのことで気遣わせることが気になっていました。
行先は今回奈良に行くとのことなので、神戸にしました。彼女にとっては1988年以来とのことで、北野の異人館をめぐりポートタワーからモザイクを散策し、神戸港の倉庫レストランでイタリア料理の昼食をとり、禁酒の制限も何処へやらビールを飲みながら歓談しました。
帰りは大阪駅横のヨドバシカメラに立ち寄り、彼女がディジタル一眼レフを買い替えると言うのでそのアドバイザーと値切り役になりました。最新のオリンパスの小振りの一眼レフに決まりましたが、ズーム倍率他の性能とポータビリティーに満足のご様子でした。もちろん英文の取扱説明書を確認しましたが、翌日の彼女のお礼のメールには、取説を熟読しもう使いこなせる、明日からのVU行きが楽しみとありました。
最近の電子カメラは超複雑で、さすが電気に！いやメカにもお強いYLさんですHi。予定（私の）を一時間オーバーして都ホテルに戻り、またの再開を約束して別れました。Bon Voyage！ The End (de JE3BEQ)

異人館で

Jeanieのお気に入り

ポートタワーの前で

大阪国際交流センター・ラジオクラブ

JI3ZAG
Osaka International House Radio Club
e-mail : ji3zag@ji3zag.net

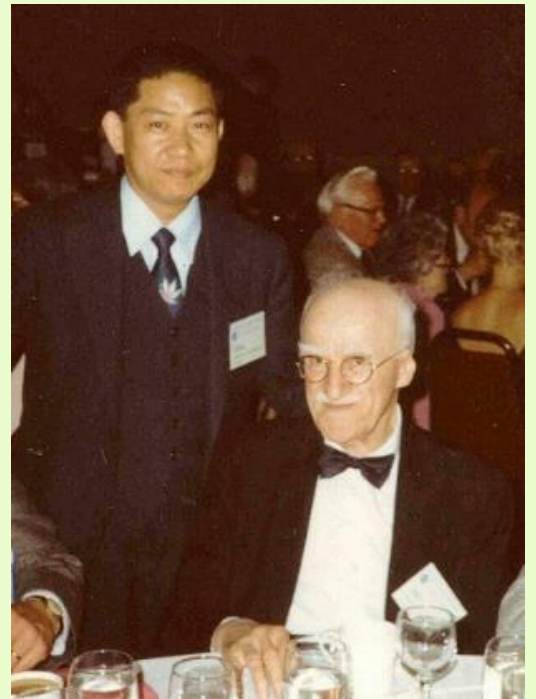
Rollcall 0900JST Saturday 21.360MHz	URL : http://www.ji3zag.net/	Club meeting 1800JST 2nd Friday at Osaka i-House

品質管理のジュラン博士を偲んで

JA3AER 荒川泰蔵

1. はじめに
アマチュア無線とは直接関係のない話題ですが、戦後、日本へ品質管理の指導に来られたジュラン博士をご存知の方は多いと思います。デミング賞で名前を知られたデミング博士は有名ですが、ジュラン博士もその日本への貢献を認められ天皇陛下から勲二等瑞宝章を受けておられる方です。そのジュラン博士が去る2008年2月28日に103歳で亡くなられましたので、私が米国で経験した事を記して、ジュラン博士を偲びたいと思います。

2. ジュラン博士との出会い
米国に赴任した翌年1979年、元の所属先、シャープ本社、商品信頼性本部、商品テスト室から手紙が届き、日科技連の主催する「第10次品質管理プロダクト・ライアビリティ海外視察チーム」が京都大学の近藤良夫教授を団長として米国を訪問するので、プログラムの一つであるASQC(American Society for Quality Control)の年次大会への参加だけでもご一緒するようにとの指示があった。この年次大会はテキサス州のヒューストンで開かれたが早速それに参加した。
ジュラン博士に最初に出会ったのは偶然で、その年次大会の会場であるThe Shamrock Hilton Hotelの廊下であったが、日本人には親しみを感じておられる様子で片言の日本語で挨拶された。
また、近藤先生のご好意により、視察団の最後のプログラムであるジュラン博士との夕食会に参加させて頂いた。会場はニューヨーク市のThe New York Sheraton Hotelで、家内(JG3FAR)と共にニュージャージーの自宅から車で出かけ参加させて頂いた。近藤先生ご夫妻からジュラン博士ご夫妻に紹介頂き、視察団の皆さんと共に夕食を共にして歓談させて頂いた(写真1)。約30年前の話である。

＜写真 1＞

＜写真 2＞

3. ASQCへの入会と支部活動への参加
その後ASQCに入会して年次大会にも毎年参加するようになって、そこでジュラン博士にもお目にかかる機会がしばしばあった(写真2)。ASQCは支部活動が盛んであり、所属したNorth Jersey Section (北ニュージャージー支部)の月例会にもよく参加した。これら年次大会や支部の月例会で会うメンバーと名刺交換をすると、ほとんどが品質管理部門の専門家である。私が差し出す名刺を見てサービスのマネジャーがなぜ品質管理の学会に参加するのかと首をかしげる時代であった。
日本ではサービスを含めて全ての部門が品質管理に関係していると答えていたことをジュラン博士に話したところ、米国の会社にはまだ品質管理の専門家がいてTQCの考え方が普及していないと話しておられた。
その後の1980年代はジュラン博士が予想しておられた通り、日本の製品の品質が欧米の品質を追い越した時代であった。支部の月例会でもよく日本の話をする機会があり、日本への視察団に日本企業を紹介することもあった。驚いたことに品質管理の指導をして欲しいとリクルートの電話がかかってきたこともあった。米国は眠れる獅子だと強がる人もいたが、多くの人は危機感を持って日本に学べとの姿勢だったので、日本で品質管理の指導で成功されたデミング博士やジュラン博士の出番が来たと思った。
日本の経済進出から危機感を持ち、日本製品の不買運動(米国製品の愛用運動)が起こったのもこの時代で、ワシントンDCで米国政府の要人に日本製品の品質の良さを訴えようとJETROの呼びかけで各社が協力して展示会を開いたが、不買を唱える国会議員に「もし、貴方の家庭でテレビを買うならどちらを選ぶか」と尋ねたところ、「日本製品であっても品質の良い方を買う」とのことで、本音と建前の違うことがわかった。ジュラン博士の当時の論文にも米国製のテレビの故障率は日本製のそれに比較して4倍もあると指摘されている。

4. 日本と米国の品質の比較

ジュラン博士は半導体製造時の歩留まりや不良率についてしばしば話されたが、米国のメーカーはデータを出したがらないとのことであった。ジュラン博士は1980年にワシントンでのセミナーで「日本製品の品質はなぜ優れているのか」について講演されたが、半導体のユーザーであるヒューレットパッカー社のアンダーソン氏は米国と日本の半導体の品質（不良率）の差は歴然と講演された。

これに関連して、ジュラン博士に私の天理工場での経験を話すと、正にそのとおりだ、米国の会社もそれに気付かねばならんとおっしゃっておられた。それは1970年代の初期の話であるが次のようなものである。

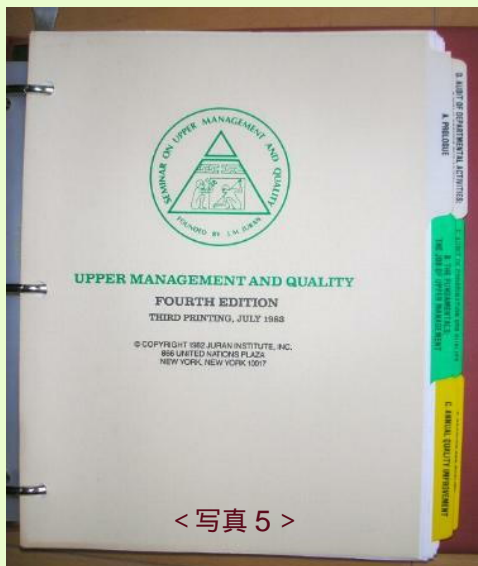
私が検査課長として勤めたシャープの電卓工場では、1台の電卓に米国製のLSIを4ケ使っていた。故障が多く受け入れ検査で全数ロジック検査をし、セットに組み込んでから2時間の低温テスト（その環境での演算テストを含む）、そして2時間の高温テスト（演算を含む）、常温エージング24時間後の演算テストを当然のように行っていて、これらの工程でもかなりの不良品が検出された。これを米国で分析してくれるよう要求すると、不良品の返送は不要、何個不良が出たか知らせてくれれば代替品を送るという。これでは改善の余地がないが、米国の会社は経済的な方法を優先させていた。そのうちシャープの天理工場でLSIを作り出した。やはり最初は不良が出たが、高くついても分析するから返品してくれという。この分析により改良が進み品質が急速に良くなった。これにより受入検査は不要になり、次第に低温検査や高温検査、エージングを必要としなくなった。結果として最初の分析コスト以上のコストダウンが果たせたという経験話である。

＜写真 3＞

＜写真 4＞

5. 西堀榮三郎博士（JF1MFU）の著書「品質管理心得帖」への推薦状

今年5月号のNLに掲載した「西堀榮三郎先生のヤルン・カン登頂時のアマチュア無線通信」の中で触れさせて頂いたが、1979年に西堀博士（JF1MFU）がシャープ株式会社の本社及び各事業本部で講演された講演集「シャープ品質管理30周年記念 西堀榮三郎博士講演集」が、後に「品質管理心得帖」として日本規格協会から単行本が発行されることになり、本社からの指示でジュラン博士に推薦文を書いてもらうため、ニューヨークにあるジュラン博士の事務所を訪れた（写真3）。ジュラン博士は西堀博士を良く知っているが、どのような内容の本か知らずに書くことは出来ないと断られ、本社とやり取りの末、内容の概要を口頭で説明させて頂くことで了解を頂き書いて頂いた。これは初刷の間に合わず、掲載は第4刷（1982年2月10日発行）以降になったが、次のような訳文が原文と共に最初のページに挿入されている。ここにもジュラン博士の日本に対する見かたと期待が込められていると思う。

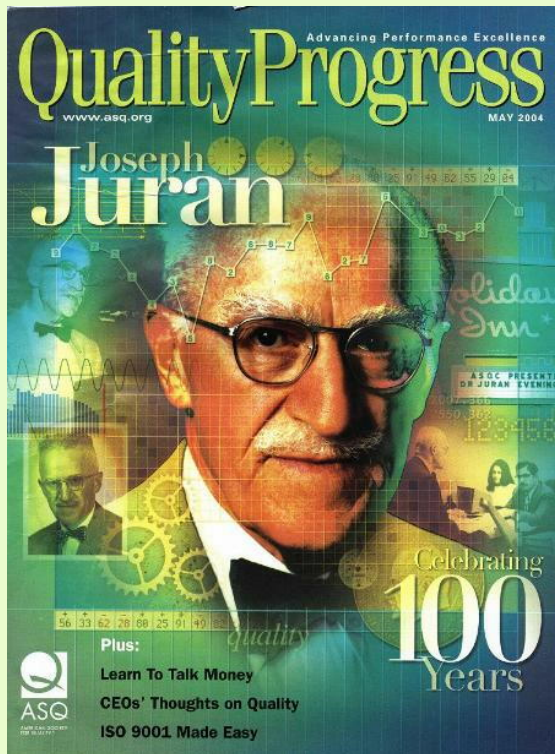
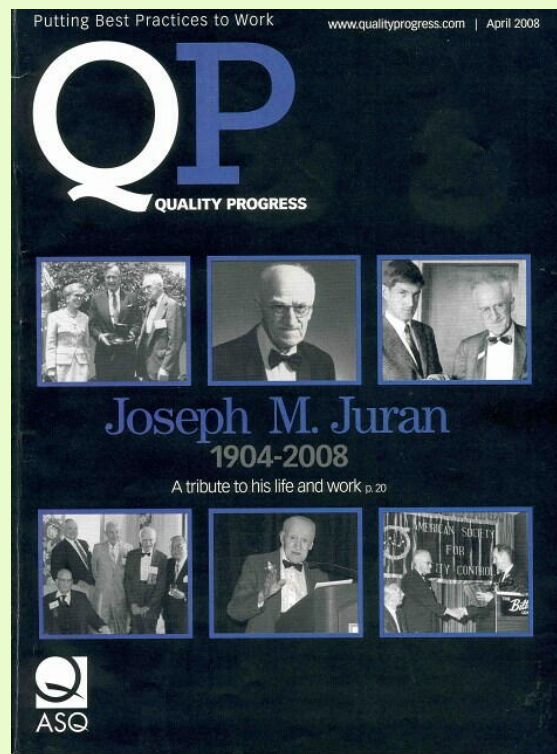
「西堀博士殿、拝啓、"品質管理心得帖"の出版おめでとうございます。貴下が、かねがね言われているとおり、人間関係を基盤とする日本の経営努力の精神は、今日の強い日本の地位を築いてまいりました。経済的、政治的には、世界は、各国の置かれた立場により左右されます。しかし、日本はたえず一貫して品質の向上と新製品の開発に貢献しています。日本の人々は、世界の人々の満足する商品をたえず作っていく努力をしていくものと信じています。貴下の心のこもったお話は、誠に大切なことです。本書が、日本企業の品質管理の技術の完成にとって、有益な役割を果たすことを私は望みます。」とあった。

＜写真 5＞

＜写真 6＞

6. ジュラン博士夫妻の邸宅訪問

ジュラン博士はお会いするたびに、日本語で「奥さんは、お元気ですか」と挨拶のように尋ねられる。家内にとっては1979年にニューヨークでお目にかかって以来お会いしていないし、私もジュラン夫人にはそれ以来お目にかかっていなかったので、1984年の秋、ボストン方面へ車で旅行する途中でコネチカット州にあるご夫妻のご自宅に立ち寄らせて頂くことにした。勿論、前もってご了解を得ての訪問であったがご夫妻は快く迎えて下さった（写真4）。ご夫妻はその時既に79歳の高齢であったがお二人ともお元気そうな様子を見て、家内が夫人に毎日どのような料理を作っておられるのか尋ねたところ、ジュラン博士の健康管理が今の私の仕事ですからとして、毎日同じような料理を作っていますとの返事だった。またご夫妻から米国での生活について家内が尋ねられ、油彩画を習っていると静物画を差し上げたところ喜んで受け取って下さった。後のクリスマスカードには部屋に掛けて楽しんでいる旨のメモが添えられていた。
ジュラン博士の書斎は広い庭の見える落ち着いた部屋であったが、この家はある作家が所有していたもので、彼はここで小説を書いていたとのことであった。その広い庭園をご夫妻に案内して頂きながら散策したのち、庭の椅子に腰をおろして歓談させて頂いた。

7. ジュラン博士の講義とIMPROの大会

1984年、ASQCの北ニュージャージー支部が主催してジュラン博士のセミナーが開催された。1日のコースであったが、近いところで費用も比較的安く受講できると喜んで出かけた。参加者は70人程度だったと記憶するが、テーマは「Upper Management and Quality」で、分厚いテキストが配布された（写真5）。挨拶に立たれたジュラン博士はお元気そうであったが、ご高齢(79歳)でもあり、実際の講義はJuran Instituteの講師が務められるものと思っていた。しかし、講義を始められてますます熱弁になり、昼食を挟んでの長時間であったが、ジュラン博士自らすべての講義をこなされた。
また、ジュラン博士を中心とするJuran Instituteがコンサルタントとして入っている会社を集めた大会としてIMPROという大会があった。ジュラン博士の紹介で1984年にシカゴで開かれたIMPROの大会に参加してみた。驚いたことにASQCの年次大会以上の盛り上がりがあり、各社のプレゼンテーションも立派なものであった。このようなやり方でお互いが切磋琢磨できるシステムで指導しておられるのかと感心した。

＜写真７＞

＜写真８＞

8. ジュラン博士の最後の講演

英国のシャープ生産工場（SUKM）に品質管理の責任者として1990年から1998年まで約8年間出向していた。米国でジュラン博士から教わったことや入手した書籍がここでは非常に役に立った。日本にもよい書籍は沢山あるが、出向員が英語に翻訳しないと現地社員には理解してもらえず、多忙な日常業務の中でそれをすることは不可能である中で、英語で書かれた米国の書籍は有り難かった。ジュラン博士の消息はクリスマスカードやASQCの機関誌で知ることが出来たが、「Last Lecture (最後の講義)」という文字を何度も見たので、もうジュラン博士の講義を聞くことはないだろうと思っていたが、1996年の秋にWales Quality Centreから案内があり、英国でジュラン博士の衛星中継による講義を受けた（写真6）。タイトルは「J. M. Juran on Quality : Yesterday, Today and Tomorrow」であった。これは全米、日本、英国を衛星中継で同時に受講できるようにしたもので、米国内は双方向のテレビで結ばれていたようだが、英国からはテレビで講義を受けながら、質問などはファックスで送らねばならなかった。多分これがジュラン博士の最後の講義であったのではないかと思う。少なくとも私が受けた最後の講義であった。このときのジュラン博士の年齢は91歳であった。

9. おわりに

ジュラン博士からはその後も毎年クリスマスカードが届き、それにはプリントではあるが近況を記した手紙が添えられていた。毎年年齢を数えておられ、最後のクリスマスカード（2006年）には、もうすぐ102歳になると書き添えられていた。ジュラン博士が100歳の時、米国でそのお祝いが行われ、日本からも懇意にされていた大学の先生達がお祝いに駆けつけた。ASQCの機関誌「Quality Progress」は2004年5月号（写真7）にその功績を称える特集を組んだ。そして、今年の4月号（写真8）はジュラン博士追悼特集であった。もう誰も、ジュラン博士の講義や講演を聞くことは出来ないが、日本に大きく貢献されたジュラン博士のご冥福をお祈りします。